

優秀賞（臨床工学技士部門） 長谷川 竜馬

過去の自分へ贈る言葉

「臨床工学技士りんしやうこうがくしという仕事はね、主に機械を相手にする仕事だから、患者さんやご家族さんから感謝されることはないよ」。十年前、就職を控えた大学生の私に、同級生はこう言いました。臨床工学技士という職業に、希望を持って就職活動をしていた私には、痛烈な言葉であったことを今でも覚えています。

臨床工学技士として働き出したある日、病院の廊下で「こんにちは。母がいろいろとお世話になりました」と、ある女性から声をかけられました。「腎不全じんふぜんの母が透析とうせきでお世話になりました。母の面会に行くと、臨床工学技士のあなたの事がよく話題に出てきました。透析中に親身になってお話を聞いてくれるし、気分が悪いと言ったら装置の設定を医師の方と話し合ってくれたり。常に優しいあなたがいてくれるから辛い透析も頑張れると、母は私に言っていました。こうして廊下で偶然あなたに出会えたのも、今は天国にいる母が

お礼を言いたがっているからなのかもしれない。母に代わってお礼を言わせてください。母を支えてくれて、ありがとう」

そう言うと、女性は笑みを浮かべて去っていきました。



「ありがとう」という言葉は、とてもありきたりな言葉かもしれませんが、私にとってはどんな言葉よりも、言われると心に残る言葉であると感じた瞬間でした。ひたすら仕事に打ち込み、奮闘していた日々の頑張りが認められたような気がして、私の心が温かいもので満たされていく感覚がありました。お礼を言われたのは私のはずなのに、逆にその女性と女性のお母様の言葉に力をもらい、私の方こそお礼を伝えたくなったのを今でも覚えています。

もし、十年前の就職を控えた自分に向けて言葉を贈る事ができるとしたら、このような言葉を贈りたい。「臨床工学技士という仕事はね、患者さんやご家族さんから感謝される、そんな仕事だ」と。

